

ころが、「思考・表現」、イエローが「気付き」ということで、3色に分けてあります。Bは概ね満足の状態で、Aが多いほど良い評価になります。これを見ていただくとわかるとおり、全体的に好ましい状態です。中でも「関心・意欲・態度」の部分が高いことが見て取れます。これを他の内容と比較してみますと、「関心・意欲・態度」については、(7)の部分がずば抜けて高い結果になっています。したがって、(7)の内容について、子どもたちは非常に高い関心をもっているし、実際の授業の中でも十分な成果が見られるということが、この結果からわかります。では、「思考・表現」についてはどうかというと、そう悪くはなく、他に比べても良い結果となっています。子どもたちが自ら考え、協力し合いながら、飼育や栽培活動を行っているということが分かります。それからもう一つ、「気付き」ということに関しても、命が大切なものであるということがわかったり、成長している様子を子どもたちが気付いて、実感していることが、結果を比較すると理解いただけると思います。

このように見ますと、5つの指定校に関しては、実現状況がたいへん良いということが言えます。先ほど申し上げた質問紙の中では、関心は高いけれども内容の実現に関してはやや低い状況であるということでした。この二つを単純に比較しますと、指定校のように集中的に生活科の実践研究を行った学校では、子どもの関心も高く結果もしっかり身に付いてくるということが言えそうです。ということは、そこまで実践の質を高めていかないと、十分な成果が得られない場合もあるということになります。

ここまで話してきたことをまとめますと次のようなことが言えそうです。現在の動物の飼育活動に関することとして、低学年では関心も高く、子どもとの相性も良い。そして子どもたちの心に残る学習活動である。一方、課題としては、子どもたちの周りに自然や生命に接する機会が少ない、学習内容を達成するためには、十分な指導を行わなければならない、飼育環境を適正なものとするのに難しさがある、子どものアレルギー等の問題もあるなどが考えられると思います。さらには、子どもたちの生命観を育成するということへの難しさも出てくると思います。

現在、学習指導要領の改訂に向けて、このようなことに視点を当てて準備を進めているところです。ここから、中央教育審議会の状況などもご紹介しながら、動物飼育のことを中心にお話しをしていきたいと思えます。審議会の中では生活科の内容について、いろいろな意見が出てきました。生活科について課題を整理しますと、生活科は体

験ばかりで、そこで学ぶことはあるのか、また、気付きが子どもたちにしっかりと生まれる学習になっているのか、あるいは生活科の中で子どもたちは十分な思考をしているのか、さらに、科学的な見方や考え方が育っているのか、というようなことが、課題としてあげられてきました。

動物飼育につながるものとしては、生命教育について、もっと実感として捉えられるような教育活動が必要なのではないか。そのときに、生活科が持っている役割は重要なのではないかということが話し合われています。そのときに、ただ動物を飼っていればいいということではなく、飼育を学習活動としていかに位置づけるかということが、学校の教師にとって大きな課題になってくると思います。

これらのことを踏まえて、次の4つのことが学習指導要領の改訂の論点になっています。「小学校生活への適応、科学的な見方・考え方の基礎、現代的な課題への対応、気付きの質を高める」です。この4点に整理して、学習指導要領の改訂について議論をしているところです。「小学校生活への適応」については「小1プロブレム」への対応ということですし、「科学的な見方・考え方の基礎」ということについては、低学年の学習内容が社会認識に傾斜しすぎているのではないかということです。動物の飼育に関しては、現代的な課題の一つとして、十分に対応していかなければならないだろうと思います。

改善の方向として、中央教育審議会で議論されていることとしては、「動植物の飼育栽培については、充実させていきましょう。」という声が多いです。これは、現在でも内容の(7)については2学年に渡って行うこととなっていますが、さらに内容的に充実させていこうというものです。たとえば、自分たちの手で育てていきましょう、ということや、継続的に飼育や栽培をしていきましょう、ということが意見として出てきています。

生命を実感するというのであれば、一般的には栽培よりも飼育のほうが実感しやすいと思います。やはり生命を実感させるという意味で、動物を飼う活動を充実させていくことが、学校教育の中では必要なことになってくると思います。

もう一つの気付きの質を高め、体験を充実させるということについては、飼育活動をしていけばいいということではなく、活動や体験自体を充実させていかなければならないのではないかと、ということが話し合われてきました。たとえば、各学校の飼育小屋の飼育環境はどんなふうになっているのか、本当に動物にとって適正な状態で飼育がされているのか、ということもあるでしょう。この辺のところについては、学校現場としてはや



や弱い部分であると思います。そんなときに、獣医師の皆さんと連携し、支援をいただきながら、適正な状況で動物を飼っていかなければならないと思います。

もう一つは、活動や体験の前後の学習をどのように教師が行っているかということ、よく考えていかなければいけないのではないかとことです。たとえば、生きものを飼うときにどのような事前指導が必要なのか、動物の世話をした後でどのような活動を行うことが望ましいのか、要などを考え、充実させることによって、活動や体験によって学んだことが、子どもの中で確かなものになっていくわけです。飼育活動をした後で、話し合いを行ったり、気持ちを文章などに表したりするだけで、子どもたちの気持ちには違いが出てくると思います。また、飼育をする前の段階で、たとえば、専門家である獣医師さんに来ていただいて話を聞いて、事前学習をしてから飼育にはいるという方法も効果的なことかもしれません。

このように、適切な飼育環境の中で飼育をすること、そして、飼育活動の前後の活動を充実させることが、命の大切さを実感させることにつながっていくのではないかと思います。生活科は体験を重視していたわけですが、その前後での学習については、やや弱かったような気がします。「体験あって学びなし」と批判される理由がそんなところにあったのだと思います。このことについては生活科の課題として考えていかなければいけないところだと思っています。

では、最後に今後の課題について3点ほどお話ししたいと思います。一つは、連携や協力を進め

ていく必要があるのではないかと考えています。各学校、各自治体等で組織的な取り組みを行っているところもありますし、また、個別に取り組んでいるところもあるかと思います。本日のような会を通して、いろいろな立場の方々が、互いに連携を取り合って、ネットワークをつくっていく必要があるのではないかと考えています。獣医師会の皆様は、学校教育に対して非常に積極的にご協力をいただいておりますので、一緒に子どもたちを育てていただければと考えています。

そして二つめは、動物飼育を学校のカリキュラムにどう位置付けるかということを考えることです。横軸においては、教科間の関連というのがあると思います。道徳にも他の教科にも動物飼育に関連すると思われる内容は出てきます。縦軸としては、生活科と総合的な学習の時間との関連性や幼児教育とのつながりを考えなければいけないと思います。そして三つ目が、教師としての授業づくりです。このようなことが充実することによって、動物や動物飼育がもっている可能性が学校教育の中に広がっていくのではないかと考えています。

本日は学会の公開市民講座に参加させていただく機会をいただき、本当にありがたく思っております。これからの実践発表や意見交換の中で、健全な飼育環境作りや、子どもたちにとってよりよい教育活動の進め方等について、多くのことを学んで帰ろうと考えております。ご静聴ありがとうございました。

(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)

